



Title	関東大震災と日本の倫理学：四つの症例研究
Author(s)	川本, 隆史
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1997, 1, p. 72-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔研究会報告要旨〕

関東大震災と日本の倫理学——四つの症例研究

川本隆史

1995年1月17日の阪神・淡路大震災では、マスコミも早くから被災者の〈こころのケア〉の大切さを訴えていた。しかしながら〈ケア〉そのものをどのような営みとして捉えたらよいのかについての議論は、必ずしもじゅうぶんに煮詰められてはいなかったのではないか。本来ならこの場で震災後の〈こころのケア〉のあり方をダイレクトに考察すべきところだけでも、あえて迂回路を採らせてもらう。すなわち、今回の震災と比較されることの多かった1923年9月1日の関東大震災、この事件が日本の倫理学に何をもたらしたのかを私なりに振り返りたい。そのため4人の思想家の言説を分析するというアプローチを選ぶが、この作業が環境倫理学の（臨牀的な？）ケーススタディを提供しえればと望んでいる。

（一）

まず和辻哲郎（1889-1960）から始める。当時34歳の彼は、千駄ヶ谷の自宅に妻子とともに被災し、その手記「地異印象記」を『思想』1923年11月号に発表した（全集第23巻）。この小篇は、地震後の大火の原因を「かくの如く一所に蟠集してかくの如き都會を築造した人間の愚」に求める一種の文明批評から説き起こし、結びの部分でも「大火に對して何の防備もない彪大な都市」を作った市民自身の油斷を戒めている。しかし和辻の手記に興味深いのは、当人の体験と感情の起伏が克明に綴られている部分である。たとえば、コリア人や社会主義者による放火の噂（いわゆる「流言蜚語」）にストレートに反応したことを、彼はこう自己分析している——「さういう不安な日〔9月2日〕の夕ぐれ近く、鮮人〔＝原文のまま〕放火の流言が傳はつて來た。我々はその眞偽を確かめようとするよりも、いきなりそれに對する抵抗の衝動を感じた。これまでは抵抗し難い天災の力に慄え戦いてゐたのであつたが、この時

に突如としてその心の態度が消極的から積極的へ移つたのである。自分は洋服に着換へ靴をはいて身を堅めた。「全市を揺り動かしてゐる恐慌に忽ちに就て感染した」彼の体験は、『倫理学』上巻（1937年）で次のように昇華される。大震災後に飛びかった「流言蜚語」こそ「常態的な世間（すなわち連絡せられた空間）が失われていたこと」を証拠だて、したがって「社会が通信報道というごとき実践的の連関によって連絡せられた空間であること」を裏面から補強する現象に他ならない、と。だが地震直後の和辻が「自分は放火の流言に對してそれが有り得ないこととは思はなかつた」と認めている点は気になる。

《倫理学》は、地震前の「常態的な世間」にコリア人差別や社会主義者への忌避が（共通感覚＝常識として？）蔓延していたことに対して、批判のメスを入れなくてよいのだろうか。

さらに和辻の文章には、「共同体感情」（中井久夫）の高揚を記した印象的な箇所がある。中井によれば、今回の震災の直後、学歴序列と貨幣経済が支配する社会システムが一時的に崩壊したとき、人びとは不思議な解放感と連帯感に浸ったとのこと。つまり、国家という社会が存在しなければ「万人が万人に対する戦争」の状態に陥るというホッブズの恫喝にもかかわらず、震災によって経済と行政機能がマヒした神戸に「普遍的友情」（津村喬）が発生したのである。この事態（とその感情の行方）をどう捉えるかは応用倫理学ないし臨床哲学にとって重い宿題となっている。そこで和辻の報告を読んでおこう——「すべてが一切の修飾を離れて純粋な人間の苦しみを現はしてゐる。自分はその苦しみを共に別たずにゐられない切迫した心持になつた。がそれは自分だけではない。目に入る限りの人間がすべてその心持を共にしてゐる様に思はれたのである。天災に縛られてゐた人間の心が今や町全體の上に湧然と涌きのぼつてゐるような心持である。……それは一方では罹災者の苦しみへの同情である、が他方では町全體に渦巻いてゐる純粋な人間の情緒への感動である。今や一切の營利のシムボルは町から消え去つた。人々はたゞ苦しみと苦しみを救はうとする心との他に何物をも持つてゐない。その人生の姿が自分を動かしたのである。」

荻部直の研究によれば、関東大震災を契機に和辻は「人格主義」（個々人が「教養」を通じて「人格」を陶冶すれば社会の調和がもたらされるという思想）

から脱却し、「人間」の立場へと転換していく。そして『倫理学』上巻において和辻が重視する「信頼」も、大震災という「限界状況」の中で発見され、その衝撃の大ききゆえに、これを体系の中枢に据えることになったと推定される（苅部『和辻哲郎 光の領国』）。震災時の「恐慌に忽ちにして感染した」体験や「純粋な人間の情緒への感動」が、彼の倫理学体系にどれほど深く刻印されているのか。こうした観点から、もう一度和辻を読み直す必要がありそうだ。

（二）

清水幾太郎（1907-1988）に移る。旧制中学三年生だった彼は、墨田区の本所で被災し、命からがら千葉県市川まで逃げのびる。その避難先で清水は、コリア人を殺害した兵隊たちが血だらけの剣を洗っている現場を目撃した。ショックに追い討ちをかけるように、少年清水がひそかに敬愛していた大杉栄の虐殺の報が届く。そして大震災からしばらくたったある日、中学校の担任の何気ない一言（「君などは社会学をやった方がよいかもしれない」）に導かれて、「私は自分の一生を社会学に献げようと決心した」。清水の場合は、学問上の出発点に大震災が位置している。

1960年の論文「日本人の自然観——関東大震災」で、清水は初めて震災を本格的に論じるようになった。この論文は、大震災を「天譴」（天から下された罰）と見るかどうかという当時の論争を主題にしている。そこで清水が比較の対象に据えた事件が、死者一万から一万五千人と推計される一七五五年のリスボン地震である。この地震は、ヨーロッパの知識人に〈神の摂理を信じ地上の悪を認めないオプティミズムに、果たして根拠があるのか〉という問題を突きつけた。フランスのヴォルテールらの活躍が功を奏して、摂理への信仰は致命的な傷を負って思想界から退場し、人間の力への信頼に立つ謙虚なオプティミズムが勝利する。この論争を機に、世は啓蒙主義の時代に突入した。こうしてリスボン地震の「死者には思想史上の意味が与えられたのに反して、関東地方の十五万の死者は空しく死んでいる。誰に向けてよいのか判らぬ憤りが、今も私の内部に残っている」。清水が憤りすら覚えるのは「日本の天譴は、非常の事態を合理化するのに便利な合言葉として使われていただけで、この観念をトコトンまで擁護する試みも、また、これをトコトンまで否認する試みも見

られぬまま、謂わゆる帝都復興の進むにつれて消えてしまったのである。……
事実、ムードと世相とに終始した」に過ぎないからだ。

その後問題作『倫理学ノート』（1972年）を発表した清水は、同書での
思索と地震襲来の危機感とが自分の中で直結していることを公に打ち明け、「
国難」を殺し文句とする強硬な地震対策を提唱し始める。さらに彼は、天皇制
と治安維持法を積極的に擁護し、日本の核武装を勧めるどころまで一瀉千里の
「転向」を遂げる。私がとくに問題にしたいのは、分配の問題をあえて欠落さ
せたままで展開される『倫理学ノート』と清水の転向との間に内在的な関連が
あるのかどうかである。

（三）

最後に、長谷川如是閑（1875-1969）と林達夫（1896-1984）の大震災体験に
触れておこう。まず如是閑については、年明けの『東京日日新聞』（一九二四
年一月三日～一月六日号）に寄せた随筆「権力の外にある世界」〔飯田泰三・
山領健二編『長谷川如是閑評論集』岩波文庫に再録〕に注目したい。これは「
震災後、道路や家屋の修繕に使う砂がところどころの道端に積みあげられてい
るのを利用して小さい子供たちの間に一種の遊びが流行り出した」という観察
記から始まる。彼はこの砂遊びに熱中する集団を「極めて自然なように極めて
鞏固な一致」がつかない点に注目する。そこでは「指導者と協同者とは、
全く渾然たる一体をなして、この一系の生活を生きようとして、そこに一個の
共同社会を作り出している」。こうした遊びの「共同社会」では、大人の世界
のように「独占と排他」あるいは「自分のものは絶対に自分のものだ」という
法律の支配はない。「共同の稼業」こそが秩序を形成し、「自分のものは皆の
ものだ」という事実だけがそこを支配している。子どもたちの「平和で鞏固な
協同社会」を作動させているのが勝義の「権力」であり、それは「武器と刑具
とに依拠する強制を必要としない」、と。戦前・戦後を通じてリベラリズムの
社会構想をこれほど見事に表わした文章を、私は他に知らない。《権力》とり
べラリズムへの透徹した把握が、震災後に流行した遊びに対する長谷川の犀利
な眼差しを通じて獲得されたことを忘れてはなるまい。

林達夫に関しては、久野収と対談の発言を引くにとどめる。藤沢市の鵜沼海

岸で罹災し自宅が全壊した林は、近くの小屋で避難生活をおくった。「来る夜も来る夜も、小さな蠟燭の心細いあかりの下で、眠っている母子を傍にして、僕は一冊の本を読み続けていました。……それが、サバティエの『アッシジの聖フランチェスコ』でした。疲れ切っているのに、毎晩その時間の来るのを待つかのようにして読みました。しかし、不思議に読める。そしてそれが救いになるんです」〔林達夫・久野収『思想のドラマツルギー』平凡社〕。このフランチェスコ体験が林の精神史研究に深みと広がりを与えている。

和辻ら四人が、大震災を原体験とする思索を繰り広げたことを示せたところで、ひとまず話を打ち切る。阪神・淡路大震災からどのような《倫理学》が語り出されてくるのだろうか。おそらく、多方面から〈異なる声〉（キャロル・ギリガン）をともなって出現するだろう。そうした声に私は耳を澄ますことにしたい。

【付記】本文は1996年5月17日、臨床哲学研究会（大阪大学待兼山会館）での講演記録に手を入れたものである。中身は私の「震災と倫理学に関するノート」（中井久夫ほか『昨日のごとく——災厄の年の記録』みすず書房、1996年所収）の二番煎じに過ぎない。にもかかわらず会場からいくつか啓発的な質問・コメントを賜ったことを感謝する。実は当日の朝、NHKから連絡があって教育テレビの新番組「未来潮流」への出演が決まった。75分番組の一つの柱に、神戸に赴いて〈こころのケア〉の現状と問題点を取材するというプランがまとまり、結局『こころの傷を癒すということ』（作品社）の著者、安克昌（神戸大学医学部助手）との対談が実現した。そして番組全体は「いのちのケアを洞察する」というタイトルで96年7月6日にオンエアされた。その総括を含んだ小文を書いたので、興味のあるかたは参照してほしい（「共生」の事実と規範——〈いのちのケア〉に向かって」栗原彬編『講座・差別の社会学4』弘文堂、1997年所収）。